

# 戦場の考古学、沖縄へ

菊池 実

ここ3年、毎年沖縄を訪問している。一昨年は12月13日から17日、永年勤続表彰に伴う特別休暇を利用した。訪問には二つの理由があった。一つは本島北部の名護と南部の浦添で開催されたウォーキング大会への参加である。歴史的風土を満喫しての20km、10kmウォーキングは心身の疲れを存分に癒してくれた。二つめは南風原文化センター所蔵の新垣安雄少尉関係資料の調査である。65年前の1945年2月16日、館林上空で米軍艦載機との交戦によって撃墜された、陸軍飛行第244戦隊新垣少尉の遺品から様々な事実が判明した。この時の資料調査の成果は、今年4月発行の『群馬文化』第302号に詳細に報告しているので、ご関心のある方はご一読ください。

昨年は7月に、高校生になった息子との二人旅であった。沖縄戦を体験した元「ひめゆり学徒」の証言を聞き、保存整備そして公開された「沖縄陸軍病院南風原壕群第20号壕」をはじめ、南部戦跡を巡った。摩文仁の丘「師範健児之塔」へ向かう少し手前、岩陰調査の現地説明会が行われていたが、息子はほとんど関心を示さなくてさっさと「師範健児之塔」の前で手を合わせていた。二人での沖縄行は、悩み多い年頃である彼に何かを感じてもらえればとの思いからである。夜は国際通りでステーキに舌鼓をうった。

そして今回は6月18日から21日まで、第14回を迎えた「戦争遺跡保存全国シンポジウム」への参加である。これに先立って、那覇到着後に元同僚の石塚久則さんとともに新垣安雄少尉の実の妹、中村和子さんと異母弟の新垣安隆さん（戦後生まれ、元高校教師）にお会いして当時の状況などを聞くことができた（写真1）。一家は沖縄戦をкаろうじて生き延びたものの、たった一人の兄を失ったこ

とに対するたちがたい思いを語りかける、その姿からは65年たった今も決して忘れることのない肉親の情を強く感じた。



（写真1 兄・新垣安雄少尉について語る中村和子さん 南風原町字津嘉山にて）

シンポジウムは南風原町との共催で「慰霊の日」にあわせて実施された。大会テーマは『ヒトからモノへ戦争遺跡の保存・活用、次世代への継承を考えるー』というものである。

私は戦争遺跡保存全国ネットワークの運営委員として第1回から今回まですべてのシンポジウムに参画し、また第1～第3分科会の中の「調査の方法と保存整備の技術」問題を扱う第2分科会の司会者として、さらに群馬と沖縄との関係で2本の研究発表を行ってきた。それは「新垣安雄少尉の戦死と遺骨発掘について」と「沖永良部島での不時着特攻機の調査」である。

各分科会は19日午後から20日夕方まで、第2分科会では韓国、全国各地と地元沖縄の発表が大学関係者、行政関係者、学校関係者、市民団体関係者などから13本の報告が続いた。多数の学生の参加もあり関心の高さがうかがえた。時間を気にしながらの進行に加え

て自分の発表もあり疲労困憊。幸い、参加者とともに夜の部でオリオンビールと泡盛片手に研究活動を語り合い、これまた存分に疲れを癒すことができた。

ちなみに第1分科会「保存運動の現状と課題」では11本、第3分科会「平和博物館と次世代への継承」では10本の発表が行われている。

最終日は戦跡巡りであったが、ある現場をみてもらいたいとのことで那覇市真嘉比に向かった。昨年172体の遺骨収集が行われた、かつて日本軍の防衛陣地のあった場所である。1945年5月12日から18日の戦闘では、米海兵隊員2,662名の戦死傷者と1,289名の戦闘疲労傷者をだしている。もちろんここを死守していた日本軍は全滅である。

すでに調査は終了して小さなプレハブに収納されている人骨や遺物を見て、調査の説明をうけた。驚愕であった。タコツボから出土した人骨は座ったまま、鉄兜は落ち頭頂骨には砲弾片による貫通孔が、腰の弾薬盒には未使用の銃弾、そして薬莢が足下から出土、日本軍の狙撃兵ではないかとの説明であった。64年間、戦死したままの状態ですべてタコツボの中に埋もれていたのである。

次いで西原町に向かった。鬱蒼とした樹木に覆われた崖面に、ごく最近日本軍陣地壕が発見された。そのうちの1ヶ所は埋没していた。埋没土を取り除きながら調査を進めると4体の人骨が狭い壕内から出土（写真2）。戦死した日本軍兵士の遺骨である。横たえられた出土状況から判断すると、負傷した兵士を戦友が壕に収容した、そんな情景が目に浮かぶ。さらにそこから少し離れた場所から全く状況の異なる遺骨が出土している。それは頭部が離脱し手や足の骨が散乱するものである（3）。付近から日本軍の擲弾筒の破片が出土。もはやこれまでと思って自爆した兵士の遺骨であろう。65年間、誰にも看取られずに崩落した壕内に埋まっていたのである。

それは生々しかった。兵士たちの最後の姿を復元できるような調査を実施し、その上で遺骨は遺族の手に返すべきものと思ったが、こうした調査はボランティア活動で行われており、国や県はほとんど関与していないという。その対応に憤りさえ感じる。



（写真2 日本軍陣地壕内から出土した人骨）



（写真3 日本軍陣地壕内から出土した人骨）

沖縄戦終結から65年、米軍普天間飛行場の移設に伴う問題で揺れる沖縄、その原点をみる思いであった。そして長い間戦後処理をおこたってきた国の責任は、問われてしかるべきものがあるだろう。

（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団：  
ぐんま教育文化フォーラム共同研究者）